また、必要な情報を集めるための読み方を身に付けさせること、結論を見通してそれを支える根拠や具体例などを効果的に配置してまとめさせること、発表の練習を十分にさせること、発表後の子どもたちの交流を図ること等にも気を配りたい。なお、本に親しませ読書活動を推進するとともに学校図書館の活用方法を習得させて日常的な利用を図ること、単元としての調べ学習だけでなく、日常的に「調べる」場を設定すること等も望まれる。

各学年で一度は本格的な調べ学習を行い、小学校及び中学校卒業時には、自己のもてる力のすべてを傾注した調べ学習の成果を卒業レポートとして作成させてみたいと考える。調べ学習を通して国語力を育成することにより、子どもたちの言語生活がより豊かになることを期待している。

国語科と関連させた総合的な学習の時間の授業の実践

津久見市立保戸島小学校 教諭　中谷　主税

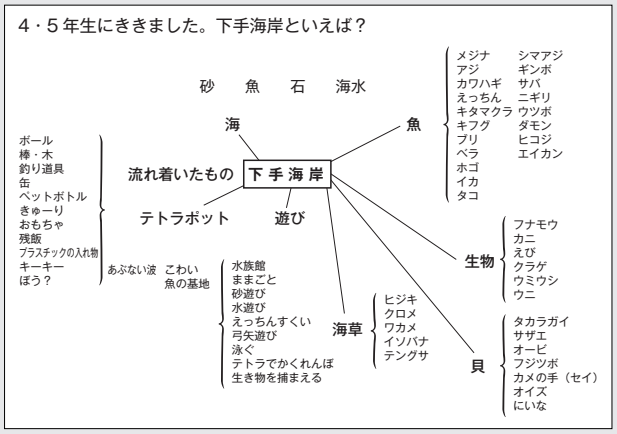
1　単 元 名　　下手海岸のいいところを調べよう

2　指導計画　　～国語科で身に付けた話す力・聞く力を活用する～

1　下手海岸に行ってみよう〈５時間〉
　①　海岸に行って遊んでみよう。
　②　ゴミの種類にはどんなものがあるか、磯の生物はどんなのがいるか調べる。
　③　流れ着いたゴミでいろんな形を作る。
2　下手海岸のよさをみんなに知らせよう〈10時間〉
　①　下手海岸をキーワードにカルタを作る。
　②　よさを知らせるためにもっと詳しく調べてみたいことを決める。
　③　自分の調べることを発表する。
　④　自分で調べる。
　⑤　調べたことをまとめる。
3　中間報告会をしよう〈２時間〉
　①　調べたことを発表し、これからの計画を練り直す。
4　夏休みの研究課題を考え直し、また調べてみよう
　①　友だちのアドバイスを聞いて、もっと詳しく調べるといいことを考え、これからの計画を立てる。
　②　※夏休みの自由研究

3　指導の実際

学校の隣にある下手海岸から連想する言葉や場所を子どもたちに出させてみた。（右図）



この中から子どもたちの興味のある生物探しや遊び、漂着物、あるいは昔の様子とどう違ってきたのか、これからどんな遊びをしてみたいのか等を追求課題に決めた。

〈対話を深める質問のあり方と教師の出番〉

今回は「自分の調べたいこと」を紹介し合う中で、「なぜそれを調べようと思ったのか」「どんなことを具体的に調べるのか」について質問やアドバイスをもらうことで、今後の追求課題を明確にさせると同時に、友だちの思いや考えを引き出す質問も出させたいと考えた。そこで、子どもたちには友だちの発表を聞いた後、質問の仕方として、**Ⅰ；友だちのすることをはっきりさせるもの、Ⅱ；友だちの考えを引き出すもの**を視点として与えた。

本時（指導計画２－③）では、次のような質問やアドバイスが出された。

Ⅰでは、調べ方をあまり深く考えていなかったＡ児の発表に対し、Ｃ児、Ｄ児がＡ児のこれからの活動計画に対して質問をした。また、自分の経験から「こうしたら…」というアドバイスをすることで、Ａ児は「なるほど、そんなふうに調べていけばいいのか。」と自分の調べる方法を修正

〈Ⅰ；質問しながら課題をはっきりさせる活動〉

Ａ：テトラポットについて調べたいと思います。
Ｂ：浅い方のテトラポットですか？深い方のですか？
Ａ：深い方です。
Ｃ：どうやって行くのですか？
Ａ：船で行きます。
Ｃ：潮が引いたときに行ったら、どうですか？行けるよ。
Ｄ：テトラポットにいる魚はどうやって調べるの？
Ａ：潜って調べます。
Ｄ：そこはエイカンが出て危ないよ。
Ｃ：釣った方がいいよ。深いよ。Ｙさんの６倍くらいあるよ。

〈Ⅱ；質問しながら考えを引き出す活動〉

Ｅ：ウミウシの背中について調べたいです。
Ｆ：ウミウシはどこにいますか？
Ｅ：下手にいます。
Ｇ：ウミウシってどんな生き物ですか。
Ｅ：なめくじのようなのです。アメフラシとも言います。
Ｈ：ウミウシとアメフラシは違うのではないですか？
Ｉ：背中しか調べないのですか。
Ｊ：なんでウミウシについて調べようと思ったのですか。
Ｅ：背中の形がおもしろかったからです。
Ｊ：初めて見たときどうおもいましたか？

することができた。Ｃ児、Ｄ児の質問は、「自分の経験からのアドバイス」としてまとめ、今後使っていきたい質問の仕方であることを押さえた。

国語科の学習でも相手を納得させるには、具体的な資料や自分の経験をもとに話した方が伝わりやすいことを学習してきている。これまで学んだことを生かして実際に使いながら、このような言い方に慣れ親しむことをこれからも続けていく必要がある。

ⅡのＥ児は生きものに関心を持ち、図鑑等をよく見ている子である。Ｊ児はＥ児がウミウシのどんなところに興味をもち、調べようと思ったのか、また、Ｅ児がウミウシを初めて見たときの印象を聞いたりしてＥ児の生きものに対する思いを引き出そうとしている。この質問を契機に、単にこれからの調べ方だけでなく、多方面に対話が広がっていった。

教師の出番としては、対話の広がる質問の仕方や感想の出し方を板書し、他の子の発表に対してもそれを参考にするよう促した。

〈効果的な相互評価の工夫〉

授業の中で出てきた対話を深める質問や感想は「ふりかえりカード」の「友だちの話し方でいいなあと思ったところを書きましょう」の設問で書かせるようにしている。教師がそれを紹介し、模造紙にまとめておくことで次の機会に使うための参考例としている。また、紹介されることで自分の言い方に自信をつけさせていきたいと考えている。

子どもたちの感想からは

・Ｔ君はみんなの質問に悩まないで答えていたのがすごい。
・自分の知っていることも交えて質問に答えていたのがいいなあと思いました。

等が出され、友だちの質問の仕方や受け答えの仕方についてカードに書く子が増えてきた。

この後、話し合ったことをもとに、自分の調べることをはっきりさせてから実際に下手海岸に行った。どの子も自分のすることがはっきりしたことで、時間いっぱい活動することができた。

４　考　　察

これまでに子どもたちが何度か行って遊んでいることのある「下手海岸」に関する内容が「伝えたい」気持ちを高め、対話が進んだ。

相互評価では、表面的な声の大きさや態度についての意見が多かったが、対話が広がる質問などはその都度子どもに紹介し、次に使ってみようと意識付けたことにより、質問の内容面を書く子が増えてきた。

しかし、話す形式にとらわれすぎると発表の際、声が小さくなったので十分に練習をして発表会に臨ませる必要がある。